

半動名詞の発達再考

前 田 満

1. 序

前田 (2019a) において、筆者は (1) の半動名詞 (half-gerund, HG) の発達をとり上げ、HG が (2) の ‘in + 動名詞’ を母体に、in の脱落 (dropping) と動名詞の現在分詞への「転換」(conversion) をへて生じたとする Poutsma (1928: 903) の主張を構文化の諸概念を用いてモデル化することを試みた。本論では、HG の発達に対するこのようなアプローチを「脱落分岐説」と呼ぶ。

- (1) a. I've been so busy *doing things for so many of my friends*.¹⁾
b. And now he should have no trouble *deciding between us*.
- (2) a. I've been so busy *in doing things for so many of my friends*.
b. And now he should have no trouble *in deciding between us*.

筆者の主張は、HG と ‘in + 動名詞 (GRD)’ がきわめて密接な関係にあることに着目したものである。先行研究では、両者の関係をどのように捉えるかが分析の方向性を決定するといっても過言ではない。とりわけ HG が ‘in + GRD’ に由来するものかどうかは 1 つの争点である。例えば、De Smet (2013) は、この点について脱落分岐説と真っ向から対立する説を唱えている。すなわち、De Smet は HG と ‘in + GRD’ が別の構文に由来し、よって前者は後者から発達したものではないと主張する。このように、HG と ‘in + GRD’ が個々に並行して発達したとするアプローチを、以

下「並行構文説」と呼ぶ。本論の目的は、これら 2 つの仮説の妥当性を新たなデータをふまえて再検討することである。

本論の構成は以下のとおりである。2 節では、筆者の提案する構文化のメカニズムとそれに基づく脱落のモデルの概略を述べる。3 節では、脱落分岐説に基づく前田 (2019a) の主張の利点と不十分な点をあげ、解決策を提案する。一方、4 節では、脱落分岐説のアンチテーゼである De Smet (2013) の並行構文説の問題点を様々な観点から浮き彫りにする。5 節では、これまで先行研究において考慮されていなかった新たなデータをふまえて、脱落分岐説と並行構文説のいずれが経験的に妥当かを改めて検討する。最後に、6 節は本論の簡単なまとめである。なお分析に際しては、Goldberg (1995, 2006) の提唱する構文文法 (Construction Grammar) の諸概念、および前田 (2016, 2018a, 2018b, 2019a, 2020a, 2020b) において提案した筆者独自の構文化のモデルを用いる。

2. 構文化のメカニズムと脱落現象

前田 (2019a) の検討に移る前に、まず筆者が念頭におく構文化のメカニズムと前田 (2018a, 2018b) で提案した脱落のモデルについて説明しておきたい。

2.1 構文化と脱記号化

さて、「構文化」とは、文字どおり構文が誕生する通時的過程を指し、それは新たな意味と形式の対 (pairing) の創出としてモデル化される (Traugott and Trousdale (2013: 22))²⁾。また、筆者の考える構文化のメカニズムは、Bybee (2001, 2002, 2007, 2010, 2013) の提唱する使用依拠モデ

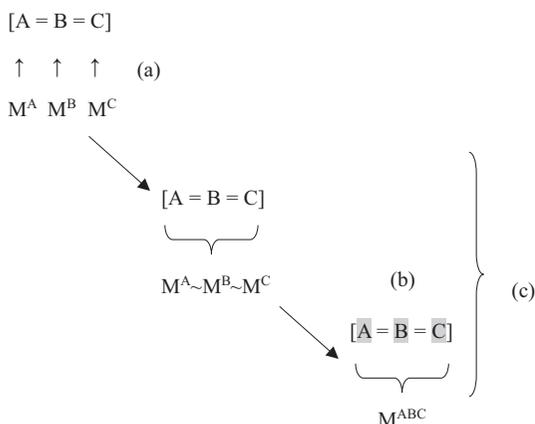


図2 ゲシュタルト化と脱記号化

見ていくと、まず構文を構成する項目 ABC の意味成分 (M^A , M^B , M^C) が構文に「吸収」され (a), 次いで吸収された項目 ABC の意味成分が構文フレーム上で「混交」する (b)。その結果、新規の構文的意思 (M^{ABC}) が生じ、また並行して項目 ABC が意味成分を失い、偽記号へと変化する (c)。

2.2 脱落現象とP脱落

次に構文化と脱落の関係に移る。文献では、「省略」と「脱落」が適切に区別されていないことが多く、研究者による用法の混乱が常態化している。場合によると、両者が互換可能な概念として扱われることすらある。だが、まずもって両者は別の現象である。省略 (ellipsis) は談話における言語操作で、(3) に示すような復元可能性の制約 (recoverability condition, RC) によって厳しく制限される。

- (3) ... words are ellipped only if they are uniquely recoverable, i.e. there is no doubt about what words are to be supplied ... What is uniquely recoverable depends on the context.

(Quirk et al. (1972: 536))

この定義の ‘uniquely recoverable’ とは、省略部の解釈が談話において唯一的に特定されねばならないことを意味する。さもなくばコミュニケーションの破綻につながりかねないが、これは RC が

談話に対する制約だからである。要するに、省略構造はコンテキスト外 (out of context) では適切に解釈できない。例えば、(4) を見てみよう。

- (4) a. You did _____, of course.
 b. A: Who said you could do this?
 B: You did _____, of course.
 [say I could do this]

(4a) の省略部の解釈は、コンテキストの助けなしには復元できない。そのため、(4a) はコンテキスト外ではいかなる解釈ももたない。このような省略は RC によって排除される。一方、(4b) では、A の発話を参考に、省略部の解釈 (‘say I could do this’) が正しく「復元」される。一方、脱落は言語変化の 1 例である (前田 (2018a, 2018b))。そのため、要素の脱落が構文に定着するためには、社会における拡散 (diffusion) とルーティン化 (routinization) を要し、定着するのに一定期間を要する。

前田 (2018b) によると、脱落は「解釈保存」と「復元可能性の自己充足」という 2 つの特性を示す。まず、「解釈保存」とは、脱落が文解釈に目立った影響を及ぼさないこと指す。重要な点は、脱落した要素の意味機能が脱落後も構文にそのまま存続し続けることである。例えば、(5) に示す前置詞の脱落 (P 脱落) の例では、

- (5) a. You are taking me to the movie (on) Friday?
 b. The public is very much into ecology (in) these days.
 c. He is (of) my age.
 d. Urawa is the city (of) the size of Omiya.
 e. Let me put it (in) this way.
 f. You’re supposed to go (in) this way.
 g. Take a couple (of) days off to relax, okay?
 h. Ronnie has been in there (for) a long time.

脱落後も前置詞の意味機能は残された名詞句に保存される。そのため、(5) において前置詞の有無は解釈の変化につながらない。また、例えば、

(5d)では、ofの脱落により名詞主要部のすぐ右に補部である名詞句が後続する [NP N NP] という、現代英語の文法に反する外文法的 (extragrammatical)⁶⁾な構造が生まれるが、このような破格な構造が許されるのも、前置詞の機能が脱落后も残存するためであろう。すなわち、(5)の前置詞は、形式上は存在しないものの、機能上は存在するといえるのである。

次に「復元可能性の自己充足」とは、脱落部の解釈がコンテキストの助けを要せず、構文内で「自己充足的」になされることをいう。結果として、脱落はRCに従わない。脱落部をもつ構文がコンテキスト外でも自由に使用できるのはそのためである。したがって、例えば、(5)の各文は会話の冒頭などいわゆる‘out of the blue’⁷⁾のコンテキストでも支障なく使用できる。この点は、先ほどの(4a)がコンテキスト外で使用できないのとは対照的である。

さらに重要な点として、前田 (2018a: 121–122) は、脱落が概して定着度の高い構文のみに見られることを指摘している。例えば、同じ前置詞 on であっても、(5a)のように容易に脱落を許す構文がある一方で、決して脱落を許さない構文もある (e.g. You can put it back *(on) the shelf.)。この違いは、on と補部名詞句との共起頻度の違いによって説明可能である。(5a)の‘on + 曜日句’では補部のヴァリエーションは日曜日から土曜日までの7種類しかないが、‘on + 場所句’ (e.g. ‘on the shelf’) では、ヴァリエーションは無量大といつてよい。2.1節で論じたように、構文化の推力は項目間の共起頻度の高さであり、そのため、‘on + 曜日句’では、その共起頻度の高さゆえ、on と補部の間にすでに構文化が生じている可能性が高い。一方、‘on + 場所句’では、補部のヴァリエーションの豊富さのため、on と個々の補部の間の共起頻度が低く抑えられ、その結果、構文化が生ずる可能性が低下する。このように、脱落の可否は構文化をへているかどうかと密接な関係にあるものと考えられる。要するに、脱落は構文化に伴って生ずる不随現象 (epiphenomenon) だと考えられる (前田 (2018a, 2018b))。

では、次に脱落が可能となるメカニズムについて見てみよう。筆者の説明はかなりシンプルなのである。実際、脱落のターゲットが偽記号に限られると考えれば、先ほどふれた脱落の2つの特性は即座に説明できる (前田 (2018a, 2018b))。まず、偽記号はいわば「意味の抜け殻」と化した要素である。それだけに、偽記号がRCの適用対象外となったとしても不思議はない。要するに、RCは意味内容の復元に対する制約であり、よって意味内容をもたない偽記号はもとよりRCの適用対象外なのである。また、そのような無機能の要素が欠落したとしても、文解釈に大きな変化は生じない。しかも偽記号の意味成分は構文の意味の中に溶けこんでおり、そのため脱落部の意味内容の「復元」の際にコンテキストに頼る必要もない。こうして、「解釈保存」と「復元可能性の自己充足」という脱落の2大特性がきわめて合理的に説明できる。以上の説明では、脱落に先立って脱記号化が生じ、ターゲットが意味機能を喪失するという構文化のモデルが前提となる⁸⁾。

3. 脱落分岐説

上記のように、Poutsma (1928: 903) は半動名詞の起源を‘in + GRD’に求め、半動名詞がinの脱落とそれに続く動名詞の現在分詞への「変換」によって生じたと主張した。前田 (2019a) は構文化の諸概念を用いてこのシナリオのモデル化を試みた。本節の目的は、前田 (2019a) の主張の概要を示したうえで、その利点と不十分な点について論じ、前田の主張をさらに精密化することである。

3.1 前田 (2019a) の提案

では、前節で述べた構文化のメカニズムと脱落のモデルを念頭において、HGの誕生と拡散のシナリオを描いてみよう。まず、HGが‘in + GRD’から構文化およびinの脱落をへて誕生したとするモデルのもとでは、‘in + GRD’からHGへの発達は前者の現れる構文ごとに個別に生ずることになる。これは構文化が個々の語列を対象として生ずるからである。とすると、HGはinと動名詞の生起頻度が最も高い環境、すなわち、‘in + GRD’

との共起頻度が最も高い構文においてまず誕生し、続いて ‘in + GRD’ との共起頻度がより低い構文へと順次拡散していくことが予測される。要するに、頻繁に ‘in + GRD’ と共起する構文ほど先に HG が出現することになる。

De Smet (2013: 111) によると、HG は 17C 後半に、‘be busy’ など少数の構文を母体に誕生し、19C 後半になって一般化する。(6) は 17C 後半の例である。

- (6) ... and so home to supper—my people busy making mince-pies.
(1666; S. Pepys, *The Diary of Samuel Pepys*;
De Smet (2013: 112))

かりに ‘(be busy) + in + GRD’ を HG 誕生の母体構文だと想定すると、図 3 のような HG 誕生のシナリオが得られる。

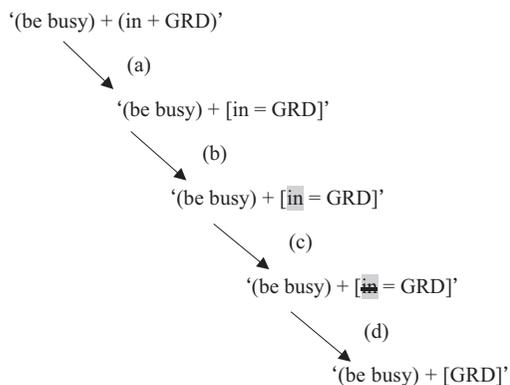


図 3 in の脱落

17C になって ‘be busy’ と ‘in + GRD’ の共起頻度が高まると、それに比例して構文内の in と動名詞の共起頻度も高まる。すると ‘in + GRD’ にチャンク形成が作用し、チャンク ‘in=GRD’ が生じ、構文目録に新規の実例として登録される。その後も ‘(be busy) + in + GRD’ が頻繁に使用され、その結果、その心的表示が認知的に強化されると、最終的に定着した構文 [in=GRD] へと発達する ((a))。構文の定着化と並行して、固定スロット in にゲシュタルト化が作用し、in は脱記

号化をへて偽記号へと変化する ((b))。その後、in が脱落すると ((c))、構文フレームの再構成⁹⁾が生じて GRD のみが残される ((d))。以上で構文化が完了し、‘(be busy) + [GRD]’ の構造が生まれる。なお、‘be busy’ と ‘in + GRD’ の間にも構文化は働くが、この点については便宜上ふれずにおく。

ただし、これだけでは HG の誕生にはいたらない。というのも、一般に現在分詞とされる HG は¹⁰⁾、動名詞である GRD と文法カテゴリーが一致しないからである。Poutsma (1928) は、おそらくこの点を考慮し、in の脱落に続いて、動名詞の現在分詞への「変換」が生じたと考えた。現在の目からすると、この「変換」という仕掛けはアドホックに響くかもしれない。しかし前田 (2019a) が指摘するように、英語史を眺めてみると、動名詞の現在分詞への「変換」には少なくとも 1 つ実例がある。すなわち、‘go + 現在分詞 (PRP)’ 構文 (e.g. I’m not *going fishing* in this rain.) の発達過程である。これに相当する初期近代英語期の構文では、しばしば ‘V-ing’ に a 接頭辞 (a-prefix) が見られる。

- (7) sure I thinke she be gone *a fishing* for her.
(1630; De Smet (2013: 111))

一般に a 接頭辞は前置詞 on ないし in の弱形 (weak form) とされる (Poutsma (1928: 983), Jespersen (1949: 93), De Smet (2013: 145, fn. 2) など)。また、‘go a + GRD’ は、‘go on + GRD’ から ‘go + PRP’ へといたる発達の間段階とされる。要するに、これは on の弱化および脱落に伴う動名詞から現在分詞への「変換」を示す事例である。この事例から、意外にも、前置詞の脱落に付随した動名詞から現在分詞への「変換」が現実にも生じることが実証される。Poutsma の分析最大の難点とも思われる「アドホック」な想定は、こうして事実によって裏づけられる。

前田 (2019a: 77-78) は、さらに進んで「変換」が生じた要因にもふれている。まず、図 3 では、in の脱落后、構文フレームの再構成の結果、in

のスロットが消滅し、構文フレームには GRD のみが残される (図3の (d))。だが、その結果、次の (8a) のような有標 (marked) な構造が生じてしまう。実際、(8b) に示すように、(8a) の [GRD] の位置に名詞句が生起できないことから、名詞句と同じ分布を示す動名詞も同様に生起できないことが予測される。ところで、(8a) の GRD が置かれた位置は、線状的な観点からむしろ現在分詞が生起しやすい位置であることに注目したい。

- (8) a. *[_S NP [_{VP} be busy [GRD]]]
 b. *I'm busy *my understanding of what has happened*.

言語においては、このような有標な事態は無標 (unmarked) なケースとの類推 (analogy) によって解消されやすい。例えば、英語史における不規則動詞の規則動詞への編入がそれに当たる。同様に、in が脱落した後の有標な構造 (8a) も、類推による有標性解消の対象となり、動名詞の現在分詞への再分析 (reanalysis) が誘発されたものと考えられる。すなわち、前田 (2019a) は、in の脱落により有標な位置に置かれた動名詞が、その環境においてむしろ無標な現在分詞として再分析されたと考えるのである。

以上が前田 (2019a) の主張の概要である。次節では、HG の誕生と拡散について、この主張によって合理的に説明できること、またこの主張の不十分な点について論ずる。

3.2 考察

本節では、前節で概要を示した前田 (2019a) の主張の妥当性を検討する。そのためにも、HG と 'in + GRD' の関係について簡単に述べておく。

脱落分岐説は何よりも HG と 'in + GRD' の間の密接な関係を重視する。両者の関係の深さを示す事実として、まず、両者の解釈が等価に近いことがあげられる。例えば、De Smet (2013: 105) は、かりに両者を交換しても、ほとんど覚知可能な解釈の違いが生じないと述べるが、これは多くの母語話者の直観と合致する。これに関連して、前田

(2019a: 62) は、両者が同一文内に並列される次の例をあげている。

- (9) He spends his days flitting through the woods with his shot-gun and his butterfly-net, and his evenings in mounting the many specimens he has acquired.
 (1912; A. C. Doyle, *The Lost World*)

これもまた両者が機能的に近いことの証左であろうと考えられる。

また、前田 (2019a: 63-64) は HG と 'in + GRD' の分布の重なりを重視する。HG は 'in + GRD' が分布する環境ならほぼどこにでも生起する。例えば、HG は、名詞句や形容詞句の内部にさえ生起するが、これは明らかに 'in + GRD' がこれらの環境に分布するからだと思われる (COCA の例)。

- (10) a. That may be caused by the difficulty *getting things approved* ...
 b. You got to be careful *dealing with this class of people*.
 (11) a. Really there is a lot of difficulty *in understanding what it is that Canadians mean when they discuss culture*.
 b. Well, I would be careful *in using the language of sin*.

以上のような意味機能と分布の一致は、HG と 'in + GRD' が別物であるとする予想をはるかに超えるものである。

これらに加えて、前田 (2019a) は、HG および 'in + GRD' の内部からの要素の抜き出し (extraction) についても、両者が並行のふるまいを示すことを指摘している。前田によると、in の有無は抜き出しの容認性に影響を与えない ((12a)-(13a) は COCA の例; (12b)-(13b) は近代英語の例)¹¹⁾。

- (12) a. Sometimes the dry, rasping supplication came in German, *which* he had difficulty translating __ but ... (COCA)
 b. ... between the fire—*which* they were busy rekindling __ ...
 (1883; R. Stevenson, *Treasure Island*)
- (13) a. It was succeeded by a sad voice, *which* he undoubtedly had difficulty in recognizing __ as that of myself. (COCA)
 b. ... many noble apartments whose walls were adorned with various battle-pieces in tapistry, and *which* we spent some time in observing __.
 (1749; H. Fielding, *A Journey from This World to the Next*)

表1 ‘have (...) trouble’ と ‘V no use’ (COHA による)

	have (...) trouble		V no use	
	HG	in - Ger	HG	in - Ger
1810s	0	0	0	0
1820s	0	3	0	7
1830s	0	10	1	27
1840s	0	2	7	23
1850s	0	10	12	25
1860s	0	9	15	31
1870s	0	29	19	38
1880s	2	29	46	50
1890s	6	34	36	39
1900s	15	41	61	54
1910s	27	41	139	43
1920s	40	44	117	46
1930s	73	38	149	36
1940s	171	33	140	37
1950s	269	26	84	21

まとめると、解釈、分布、そして統語的ふるまいに関して HG と ‘in + GRD’ はほぼ同じ特性を示す。両者が別の構文だとすると、これほどのふるまいの類似は想定外であろう。逆に、前田 (2019a) が主張するように、HG が歴史的に ‘in + GRD’ に由来するとすれば、両者の並行性は当然の帰結である。まず、2.2節で論じたように、脱落は一般に「解釈保存」を示す。すなわち、脱落のターゲットの意味成分は、脱落後もそのまま構文に存続し続ける。そのため、脱落の有無に関わらず構文の解釈は基本的に変化しない。したがって、HG の誕生に in の脱落が関与したとすれば、HG と ‘in + GRD’ の解釈が等価に近いことは、「解釈保存」によってきわめて合理的に説明できるのである。また、両者の分布がほぼ重なることや両者が抜き出しについて並行のふるまいを示すことは、HG が ‘in + GRD’ に直接由来することを示唆するものである。

さらに前田 (2019a: 74-77) は、HG の拡散パターンがまさにほぼ脱落分岐説の予想どおりであることを COHA の調査によって実証している。上記のように、脱落分岐説によると、HG の発達は ‘in + GRD’ の現れる構文ごとに個別に生じ、そのため、HG は ‘in + GRD’ との共起頻度がより高い構文からより低い構文へと順次拡散していく

ことが予測される。また、この想定では、‘in + GRD’ の生起頻度が高まらないかぎり HG は生じないし、また HG の一般化も起こらないことになる。

前田は ‘have (...) difficulty’, ‘spend (...) time’, ‘have (...) trouble’, ‘V no use’, ‘V no point’, そして ‘V no sense’ という6つの構文を用いて HG と ‘in + GRD’ のトークン数の変遷を調査した。表1に典型的な HG の拡散パターンを示す。ここでは、紙数の関係上、‘have (...) trouble’ と ‘V no use’ のみをサンプルとして用いる。

見ていくと、まず ‘have (...) trouble’ では、19C 後半に ‘in + GRD’ との共起頻度が急激に高まり、HG との共起はややそれに遅れ、20C 以降に一般化する。一方、‘V no use’ では、HG の一般化は19C 後半以降と、‘have (...) trouble’ とくらべてやや早いですが、これは ‘in + GRD’ との共起頻度の高まりが19C 前半に生じているからであろう。これらの数字から、HG の一般化が ‘in + GRD’ の一般化を追うように生じたことが見てとれる。

前田 (2019a) による COHA の調査では、‘in + GRD’ の一般化がその発達時期とは無関係に、HG の一般化に先行することが示された。これは構文化によって前者から後者が発達したとする、前田 (2019a) のシナリオの予想とうまく調和す

る。というも、前田のシナリオでは、‘in + GRD’からHGへの発達は、特定の構文におけるinと動名詞の共起頻度の高まりによって誘発されるからである。前田(2019a)によるCOHAの調査結果はおおむねこの予測と合致した¹²⁾。

以上のように、脱落分岐説および前田(2019a)の分析には大きなメリットがある反面、いくつかの問題が残された。まず、HGの発達と拡散を構文化の働きによって説明するモデルでは、‘in + GRD’との共起頻度の低い構文にはHGは現れないことが予測される。この予測は統計的におおむね妥当だが、少数ながら例外も存在する。(14)に示すように、頻度は低いものの、‘in + GRD’と共起頻度の低い構文にもまれにHGが現れるからである(COCAの例)。

- (14) a. Oh, she could take pleasure *mooning over it privately*, all right ...
 b. Take care *wielding it*.
 c. The record doesn't show it, but the Tigers are making progress *developing players*.

(14)の‘take pleasure’, ‘take care’, ‘make progress’といった構文は‘in + GRD’との共起頻度が低いので、inと動名詞に構文化が作用する可能性は低い。したがって、こうした例では、構文化によるHGの出現というシナリオは説得力が弱い。むしろこうした例は他の構文との類推(analogy)によって説明するべきであろう。すなわち、上記の構文は、‘have (...) difficulty’, ‘spend (...) time’, ‘have (...) trouble’といった‘in + GRD’およびHGのいずれとも高頻度で共起する他の構文との類推を通じて、HGを容認するようになったと考えるのである。前田(2019a)は、こうした類推が働く可能性を考慮に入れていない。

前田(2019a)のもう1つの不十分な点は、動名詞から現在分詞への再分析が生じたことを示す直接の証拠、すなわち、HGが元は動名詞だったことを示す確たる証拠を提示できなかったことである。もっとも前田(2019a)も、(15)のような例が再分析の証拠となりうることを示唆している

が、資料不足のため明言を避けている。

- (15) There's no good *my knocking about the house all the afternoon ...*

(1897; W. S. Maugham, *Liza of Lambeth*)

(15)では通常‘in + GRD’またはHGがくるべき位置に、所有格主語をもつ明らかに動名詞とわかる‘V-ing’が生起している。前田によると、この構文は動名詞から現在分詞への「変換」をへていない発達段階のHGを示す例である可能性がある。したがって、このタイプの構文は脱落分岐説の妥当性をめぐってきわめて重要な意味をもちうる。この点を考慮し、この構文については、新たなデータとともに、改めて5節でとり上げる。

4. 並行構文説

本節の目的は、De Smet(2013)の主張の問題点を指摘し、脱落分岐説が並行構文説より経験的に妥当であることを示すことにある。上記のように、並行構文説は脱落分岐説に対するアンチテーゼとして比較的最近になって登場した仮説である。筆者の知るかぎり、主唱者はおもにDe Smet(2013)のみである。では、まずDe Smetの主張に耳を傾けてみたい。

4.1 De Smet(2013)の提案

De Smet(2013)の提案する並行構文説では、HGはかつて付加詞節(adjunct clause)であったものが、彼が「再解釈」(reinterpretation)と呼ぶ過程をへて節内に編入されたものである。具体的には、推論(inference)を通じて述部と付加詞節の間に密接な意味関係が生まれ、それによって、述部の「精緻化サイト」(elaboration site)¹³⁾への後者の編入が促進されたという。図4は、(1b)の例をサンプルに、De Smetの考える再解釈の過程を簡略化して図示したものである。

また、再解釈の過程と並行して現在分詞に意味変化が生じ、付加詞節としての解釈が大きく制限された結果、‘in + GRD’に近い解釈を獲得したという。De Smet(2013: 115)によると、上記の再解釈が生ずる橋渡しコンテキスト(bridging context)¹⁴⁾

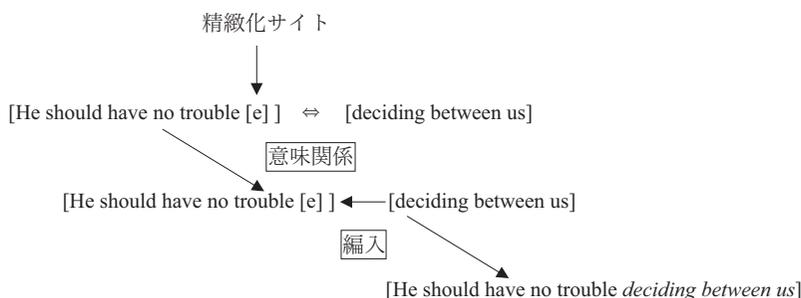


図4 HGの再解釈

として働いたのは、(16)のような環境である (1666年の例)。

(16) Up, and to the office betimes; and there all the morning very *busy*, *causing papers to be entered and sorted*, to put the office in order against the Parliament ...

(De Smet (2013: 115); 引用元の強調)

(16)では、コンマから現在分詞が主節外の付加詞だとわかるが、一方で、この現在分詞は解釈上HGにきわめて近い。このようなコンテキストでは、推論を通じて *busy* と現在分詞の間に生じた意味関係により現在分詞の再解釈が誘発され、付加詞節の精緻化サイトへの編入が強く促進された。これが De Smet の考える HG 誕生のシナリオである。

だが、並行構文説を採用するかがり、そのままでは ‘in + GRD’ と HG の分布の重なりを予測できない。そのため、HG を ‘in + GRD’ の分布域に拡散させる何らかの仕組みが必要となる。De Smet が頼りにするのは「範列的類推」(paradigmatic analogy) という彼独自の概念である。範列的類推による拡散は、共通のニッチで競合する他の構文の分布域をそっくりそのまま「乗っ取る」かたちで進行する (De Smet (2013: 68))¹⁵⁾。そのシナリオによると、HG は図4の再解釈をへて、まずは ‘be busy’ をはじめ少数の構文を母体として再解釈をへて誕生し、その後、‘in + GRD’ との範列的類推を通じてしだいに ‘in + GRD’ をとる他の構文へと拡散する。このシナリオが正しけれ

ば、HG は ‘in + GRD’ の分布域にそって拡散するので、両者の分布の重複を巧妙に説明できる。

4.2 考察

さて、このシナリオの明らかな利点は、ともするとアドホックな想定とみなされかねない動名詞の現在分詞への「転換」を必要としない点である。これは、並行構文説では HG がもともと ‘in + GRD’ とは別の構文とされるからである。もっとも以下で論ずるように、De Smet (2013) のシナリオは、ともかく多くの想定を必要とし、しかもそれらの子細に検討してみると意外に難点が多い。

まず、HG の誕生に必要とされる再解釈の過程から見ていこう。De Smet の考える再解釈は頻発しなければ定着せず、HG の誕生にはつながらない。したがって、De Smet のシナリオの妥当性を示すためには、HG の揺籃期において (16) のような例の生起頻度が顕著に高かったことを示す必要がある。あいにく De Smet はこの点について詳細なデータをあげていない。例えば、(16) のような例は、*The Diary of Samuel Pepys* 『サミュエル・ペープスの日記』に頻繁に見られると述べるのみで、具体的な例数を示していない (De Smet (2013: 115, fn. 4))。このように、De Smet のシナリオは概してデータの裏づけが盤石でないように思われる。しかも「再解釈」というおおよそ一般的とはいえないメカニズムを要する点も難点としてあげられる。

次に、HG と ‘in + GRD’ が別構文でありながら両者の解釈が等価に近いのはなぜかという点について、De Smet は、再解釈と並行して現在分詞に意味変化が生じ、‘in + GRD’ に近い意味を獲得したと主張する。だが、肝心の意味変化のメカニ

ズムが明らかにされていない。しかもかりに再解釈により HG の意味が ‘in + GRD’ とほぼ同義になったとすれば、同義を避ける言語の一般的傾向——いわゆる阻止効果 (blocking effect) ——によって再解釈それ自体が阻止される恐れもある¹⁶⁾。De Smet の分析では、概して HG と ‘in + GRD’ の意味・ふるまいの平行性、そして両者の緊密な関係について論が尽くされていない。HG の起源を論じながら、両者の間の関係を深く追求しないというのは、まさに片手落ちというほかない。

さらに HG の拡散を説明するために必要な範列的類推という仕組みの有効性も疑わしい。そもそも範列的類推は、不定詞や動名詞の拡散を説明するために他でもない De Smet 本人が導入した独自の概念であり、その妥当性はひとえに彼自身の分析の是非にかかっている。これでは説明の「切り札」として有効とはいえないだろう。

また、HG が類推 (analogy) によって拡散したという主張それ自体にも疑問の余地がある。類推による変化には2つのパターンがある。1つ目は類推的水平化 (analogical leveling) で、パラダイム (paradigm) における変異の縮減に向かう変化である。また、類推的水平化はトークン頻度 (token frequency) の低い要素に優先して作用する。これはトークン頻度の低い成員は、心的表示の弱さのため、アクセス可能性 (accessibility) が低く、よりトークン頻度の高い規則的な成員へと同化しやすいからである (Bybee 2010: 66)。一方、トークン頻度の高い成員はなかなか類推を受けつけない。これはトークン頻度の高い要素が強い心的表示をもち、そのためアクセス可能性が高く、あらゆる変化に対して耐性をもつからである¹⁷⁾。その結果、たとえ旧来の成員であっても、トークン頻度が顕著に高いものは、しばしば長期間にわたりパラダイムに保存される。以上の点から、このタイプの変化において類推のモデルとなるのは、パラダイムにおいて最もトークン頻度の高い成員であることがわかる。

もう1つのタイプの類推変化は、類推的拡張 (analogical extension) で、以前は存在しなかった新たな変異をパラダイムに導入する過程である。

これはもともとパラダイムに属さない要素をタイプ頻度 (type frequency) の高い、すなわち、生産性 (productivity) の高いパラダイムが吸収していく過程である。そのため、このタイプの類推変化において類推のモデルとして働くのは成員数の多いパラダイムである。なお類推的拡張は類推的水平化に比べてかなりまれな現象であるという。

さて、De Smet の考える範列的類推はどちらのタイプの類推変化だろうか。まず、De Smet が主張するように、HG の拡散が ‘be busy’ など少数の構文から始まったのであれば、それは類推的拡張のパターンとは相いれない。というのも、類推的拡張は多くの成員を抱える大所帯のパラダイムが新たな成員をとり込んでいく過程だからである。となると、範列的類推は類推的水平化の特殊例となるが、実際、‘in + GRD’ が HG によって置き換えられていく過程は、パラダイムにおける変異の縮減へと向かうという点で、類推的水平化の示すパターンに近い。上記のように、類推的水平化は、パラダイムにおけるトークン頻度の低い成員が高い成員へと同化する過程である。これはトークン頻度の低い成員は心的表示へのアクセス可能性が低く、よりアクセス可能性の高い生産的パターンに容易に吸収されるからである。

一方、前田 (2019a: 74-76) および3.1節で示したように、HG の拡散は ‘be busy’ や ‘spend (...) time’ など、‘in + GRD’ との共起頻度が高い構文から低い構文に向かって進んだと思われる。これは類推的水平化の示すパターンとは逆の方向となる。本来は ‘in + GRD’ との共起頻度の低い構文ほど、心的表示において構文と ‘in + GRD’ の結びつきが弱いため、‘(be busy) + in + GRD/HG’ のような生産的なパターンとの類推によって HG を容認しやすいはずである。要するに、‘in + GRD’ との共起頻度の低い構文ほど早く HG を受容することが予想される。一方、共起頻度の高い構文と ‘in + GRD’ の組み合わせでは、トークン頻度の高さのために心的表示が強化され、容易に他のパターンを受け付けなくなる。したがって、‘in + GRD’ との共起頻度の高い構文は HG の受容に強い抵抗を示すはずである。結局、HG の拡散は ‘in + GRD’

と共に起頻度の低い構文から高い構文へと進むことになる。あいにくこの予測は前田 (2019a) の調査結果と調和しない。以上のように、範列的類推により HG の拡散を説明しようとする De Smet の試みは十分とはいえない。

本節で見たように、De Smet の提案する並行構文説には数多くの経験上および概念上の問題が指摘できる。とりわけ HG と ‘in + GRD’ の解釈的・統語的ふるまいの並行性、両者の緊密な関係についての考察の不足、また位置づけの不明瞭な想定多用は、説明としての価値を大きく損なうものである。一方、並行構文説をとるメリットは、脱落分岐説において必須となる動名詞から現在分詞への「変換」を要しないという点のみにつきる。以上の点を勘案すると、De Smet の提案する並行構文説の経験的妥当性は脱落分岐説にくらべて低いと考えられる。ただし、これだけで並行構文説が完全に否定されたことにはならない。そのためには、HG がもともと動名詞であったことを直接的に証明する必要がある。次節では、新たなデータをもとに、この点についてより深く追求したい。

5. 動名詞主語をもつ HG

本節では、前田 (2019a) の執筆時点で調査が十分でなかった所有格主語をもつ HG についての新たな調査結果と、それが脱落分岐説および並行構文説の妥当性に対して示唆することについて検討する。

5.1 COHA による調査

さて、前節でも指摘したとおり、前田 (2019a) の提案する HG の誕生と拡散のシナリオにさらなる確証を与えるためには、現在分詞への再分析が生ずる以前に HG が実際に動名詞であったことを実証する必要がある。最大の障害は、そもそも in がなければ、動名詞と現在分詞の識別が困難なことである。両者を文法的に区別する特徴があるとすれば、所有格主語の有無のみであろう。だが、HG はもちろんのこと、‘in + GRD’ にも通常、顕示的主語は現れない。これは現代英語にかぎらず、歴史的に見てもそうである。ただし 1 つ例外がある。すなわち、(17) のような there 主語をも

つ構文にかぎっては所有格主語をもつ ‘in + GRD’ の例がまれに見られる (COCA の例)。

- (17) a. There’s no point in *my* looking back on this and second-guessing myself ...
b. Well there’s no use in *my* going back home now, so is there anything I can help you with?

同様に 19C の文献でも、所有格主語が there 主語をもつ構文にかぎられることは現在とかわらない。

- (18) a. There’s no use in *my* going to live with an old lady that’s testy and cross, maybe, and would grudge me every morsel of meat.
(1848–50; W. M. Thackeray, *The History of Pendennis*)
b. The two men met afterwards, so there would ha’ been no good in *my* denying it to one of ‘em.
(1876; G. Eliot, *The Hand of Ethelberta*)
c. There will of course be no difficulty in *my* obtaining an ample supply for any length of time ... (1882; T. Hardy, *Two on a Tower*)
d. I think there can be nae difficulty in *your* telling Mr. Justice ...
(1817; W. Scott, *Rob Roy*)

(17)–(18) の ‘in + GRD’ から in が脱落すれば、そのまま ‘There’s no use *my/your* V-ing’ の形の構文が生みだされる。この点を念頭に置いて、COHA および 19C–20C 初頭の小説の調査¹⁸⁾を行ってみると、次のような所有格主語を伴う HG の例が多数得られた。

- (19) a. There’s no good *my* knocking about the house all the afternoon ...
(1897; W. S. Maugham, *Liza of Lambeth*)
b. There is no use *your* telling me that you are going to be good ...
(1890; O. Wilde, *The Picture of Dorian Gray*)

- c. There's no use *our* talking to her ...
(1883; COHA)
- d. There's no use *your* following me around
this way. (1898; COHA)

前田 (2019a) の執筆段階ではわずかだった例が、今回は COHA の調査によりまとまった数の例が得られた。これらの例は、まさしく (17)–(18) から in のみが抜け落ちたかのように見える。

では、調査結果に移る。表 2 は COHA の 1810 年代から 2000 年代のデータに見られる所有格主語をもつ HG (以下、'POSS + HG' と略記) の例数を構文ごとに示したものである。この調査を終えて気づいた点は、'POSS + HG' の分布の偏りである。すなわち、'POSS + HG' はごく少数の構文、すなわち、'V no use', 'V no sense', 'V no point' および 'V no good' のみと共起する。さらに興味を引かれるのは、'POSS + HG' を容認する構文がすべて there 主語をもつことである。これは there 主語と HG における所有格主語の顕在化の間に何らかの因果関係が存在することを物語っている¹⁹⁾。

この表から明らかなおと、'POSS + HG' の分布は there 主語をもつ構文の間でも大きな偏りが見られる。'POSS + HG' と共起する構文のなかで、まとまった数の HG が見られるのは、'V no use' のみで、'V no sense', 'V no good', そして 'V no point' の例数はわずかである。また、分布のピークは 19C の終わりから 20C の中庸だが、例は 1970 年代まで見られる。COHA の初出は 1883 年で、(20) がそれにあたる。

- (20) There's no use *our* talking to her—we've done
with that at our house.

ちなみに 3.2 節の表 1 によると、'V no use' については、通常の HG と共起する例はすでに 1830 年から見られる。したがって、(20) は HG として特別古い例というわけではない。また、COCA では、わずかながら現在まで例が見られる。

- (21) If so, there's no use my trying to tell you
anything further ... (2012; COCA)

表 2 顕示的主語をもつ HG の構文ごとの分布 (COHA による)

	'V no use'	'V no sense'	'V no good'	'V no point'	計
1810s	0	0	0	0	0
1820s	0	0	0	0	0
1830s	0	0	0	0	0
1840s	0	0	0	0	0
1850s	0	0	0	0	0
1860s	0	0	0	0	0
1870s	0	0	0	0	0
1880s	1	0	0	0	1
1890s	3	0	0	0	3
1900s	1	0	0	0	1
1910s	11	1	0	0	12
1920s	3	0	0	0	3
1930s	9	1	1	0	11
1940s	3	0	0	0	3
1950s	6	1	0	1	8
1960s	3	0	0	0	3
1970s	1	1	0	1	3
1980s	0	0	0	0	0
1990s	0	0	0	0	0
2000s	0	0	0	0	0
計	41	4	1	2	48

以上のように、‘POSS + HG’は19Cの終わりから20Cにかけて、あるいは最近まで、‘V no use’をはじめ there 主語をもつ構文で用いられてきた²⁰⁾。

5.2 考察

では、ここで‘POSS + HG’の存在が、HGの発達に対して何を示唆するかを考えてみよう。上述のように、筆者の支持する脱落分岐説では、発達のある段階で動名詞が現在分詞へと「変換」されたものとする。だが、こうした想定は、直接的な実証が困難であることから、アドホックな仕組みとみなされやすく、ともすると脱落分岐説の「アキレス腱」となりかねない。たしかに‘go + PRP’構文の例から、動名詞から現在分詞への「変換」の実在性は実証できるものの、できればもっと直接的な経験的証拠がほしい。例えば、疑問の余地なく動名詞だとわかるHGの存在を示せば、HGの起源が動名詞であるという主張の説得力が大幅に増す。この点において、(19)–(21)の‘POSS + HG’は、脱落分岐説の妥当性を示す決定的証拠となりうる。実際、‘POSS + HG’が一般のHGの「変換」後も、動名詞のまま保存された「レリック」だとすれば、それは脱落分岐説を実証するうえで、誠に都合のよい存在となる。

ところで、‘POSS + HG’のみが動名詞のまま現在まで保存されたのはなぜだろうか。上記のように、前田(2019a)は、動名詞から現在分詞への「変換」を現在分詞との類推によって生じた再分析だと主張した。‘POSS + HG’に再分析が生じなかった理由として考えられるのは、顕示的主語の存在である。すなわち、‘POSS + HG’において再分析が生じえなかったのは、所有格主語の存在が話者に動名詞であることの曖昧性のない手がかりを提供したためではないかと考えられる。これが正しければ、(19)–(21)の例は一般のHGが現在分詞へと変換される以前の、いわばHGの「在りし日の姿」とどめるものと理解できる。

まとめると、(19)–(21)のような‘POSS + HG’は、HGでありながら動名詞であることが明らかな点で特異である。これらの例の意義は、脱落分岐説の弱点となりかねない動名詞から現在分詞への

「変換」を想定する直接的証拠を提供する可能性である。すなわち、動名詞から現在分詞への「変換」がHGの発達において実際に生じたことを直接的に証明するためには、HGがかつて動名詞であったことを示す必要がある。しかし、あいにく大半のHGでは、動名詞と現在分詞を形式的に区別する手立てがなく、古い時代のHGが動名詞であったかどうかを証明するのは不可能に近い。こうした八方ふさがりの状況において、‘POSS + HG’はHGがかつて動名詞であったこと、ひいては脱落分岐説の想定を実証する格好の証拠を提供する貴重な存在となりうる。一方、HGを元から現在分詞だと考えるDe Smet(2013)のシナリオは、4.2節で指摘した問題に加えて、‘POSS + HG’の存在によってその基盤を失う恐れがある。この点からも、HGの誕生および拡散を説明する仮説としては、脱落分岐説の方が並行構文説より経験的に優れていると言わざるをえない。

6. まとめ

本論では、脱落分岐説に基づく前田(2019a)の仮説を支持し、さらにそれを精密化するため、その利点と問題点を洗い出し、いくつかの修正を加えた。また、新たなデータにより脱落分岐説の補強を試みた。一方で、De Smet(2013)の提唱する並行構文説に対しては、新たにいくつかの問題点を指摘し、その経験的妥当性に疑問を投げかけた。とりわけ今回調査を行った‘POSS + HG’の存在は、脱落分岐説の弱点とも思われた動名詞から現在分詞への「変換」を想定することの直接的証拠となり、しかも並行構文説に対しては潜在的な反証となりうることを指摘した。本論の考察から、HGの誕生および拡散を説明する2つの仮説のうち、脱落分岐説の方がより経験的に妥当だと結論づけられる。

注

1) 現代英語の例は、特に断らないかぎりすべてコミック誌(Archie Comics)のスク립トを用いて筆者自身が作成した電子テキスト(執筆時点で約740,000語)からの引用である。

2) 構文化の詳細については、Traugott and Trousdale

- (2013), Barðdal et al. (2015), Coussé et al. (2018), 秋元・前田 (2013), 秋元・青木・前田 (2015) および前田 (2016)などを参照。
- 3) 使用依拠モデルについては, Barlow and Kemmer (2000), Bybee (2001, 2007, 2010, 2013), Bybee and Hopper (2001), Goldberg (2006), Diessel (2004, 2015, 2016, 2019), Blumenthal-Dramé (2012), Behrens and Pfänder (2016), Divjak and Caldwell-Harris (2015), Traugott and Trousdale (2013: Ch. 2), Sanford (2014)などを参照。
- 4) 構文目録については, Goldberg (2006: 64), Traugott and Trousdale (2013: 11-13), Hilpert (2014: 13-14, 2015: 354)などを参照。
- 5) 「形式的イディオム」(formal idiom) と呼ばれるタイプの構文には, 構文のトークンすべてに共通する固定化した要素が見られ, それを「固定スロット」という。前田 (2020a: 29)を参照。
- 6) Fillmore et al. (1988: 505)は, 共時的な文法体系の規格外となる構造を「外文法的」と呼ぶ。なお, 外文法的構造の多くは, 過去に生産的 (productive)であった構造がいわば「レリック」として構定の構文に保持されたものである (前田 (2016))。
- 7) 本論で用いる ‘out of the blue’ は, 先行する談話に明瞭なコンテクスト情報がない状況を指し, それ以上の含蓄はない。
- 8) ここで1つ注意喚起をしておきたい。これまで構文化に付随して脱落が生ずるメカニズムについて論じてきたが, これはいわば脱落の必要条件にすぎない。したがって, 偽記号であることは脱落の前提となるが, 偽記号であれば必ず脱落の対象となるというわけではない。要するに, 脱落が可能であることと実際に脱落が起こることは別問題なのである。これは, 上記のように, 脱落はそれ自体が言語変化であり, そのため, 脱落が特定の構文に定着するかどうかは事前に予測不可能だからである。実際に脱落が生ずるためには, 脱記号化に加えて, 脱落の十分条件となる談話上の動機 (motivation) が必要となる (前田 (2018a: 125))。おそらく脱落の動機として最もありふれたものは発話労力の節約であろう。だが, 脱落の動機の事後的な特定にはかなりの困難が伴う。
- 9) 構文フレームの再構成を想定する根拠は以下のとおりである。まず, (5)のP脱落を示す変種に対して「空のP」(empty P)を想定する経験的根拠は何もない。しかも本論の分析が依拠する構文文法では, そもそも空の要素を想定することができない (Croft (2007: 490))。したがって, 脱落が定着してターゲットの要素が顕示化しなくなった段階で構文フレームの再構成が生ずるものと想定せざるをえない。
- 10) Poutsma (1928), 原沢 (1957), De Smet (2013), 大室 (2016)などを参照。
- 11) Chomsky (1981)などによると, 付加詞節からの要素の抜き出しは容認されない。このことから, HGおよび ‘in + GRD’ は付加詞節ではないと結論づけられる。HGおよび ‘in + GRD’ が文法項 (argument)に近い特性を示す点について, 前田 (2019a: 79, n. 6)は, 両者を Goldberg (1995: 65)のいう「斜格項」(oblique argument), すなわち, 語彙的にプロファイルされない文法項 (lexically unprofiled argument)として分析することを示唆している。簡単に言うと, HGおよび ‘in + GRD’ は, 述部ではなく構文によって直接選択される要素だと考えるのである。また, De Smet (2013: 103-104)は, HGを「周辺的な補文 (marginal complement clause) と分析する。だが, 前田 (2019a)は, この分析の是非についての判断を留保している。
- 12) この一般化の例外となるのは, ‘have (...) difficulty’である。前田 (2019a: 74)によると, 19C前半における ‘have (...) difficulty’ と ‘in + GRD’ の共起頻度は他の構文と比較して格段に高い。よって3.1節のシナリオの予測によると, この構文におけるHGの一般化は, 他どの構文にも先行するはずだが, 19C前半では ‘have (...) difficulty’ とHGの共起はほとんど見られない。前田 (2019a: 75)は, この構文の例外的ふるまいを「保守効果」(conserving effect)によるものと考えた。なお保守効果については, 注17)を参照。
- 13) 簡単にいうと, 精緻化サイトとは, 構文フレーム内のオープン・スロット (open slot)を指し, 構文Aの精緻化サイトに別の構文Bが編入されると, 前者の構文フレームが精緻化 (elaboration)され, 構文の意味解釈が補完される (Langacker (2008: 198-199)など)。
- 14) 橋渡しコンテクストについては, Heine (2002: 84-85)を参照。
- 15) 範列的類推は, 「範列的關係」(paradigmatic relation)にある構文の間でしか働かない。2つの構文が範列的關係にあるとは, 両者が機能的に等価で, しかも同じニッチを共有することを指す。HGと ‘in + GRD’ はほぼ意味・機能的に等価であり, 同じ環境で競合するため, 定義上, 両者は範列的關係にあるものとみなしうる。
- 16) 同義の表現を避ける言語の傾向については, Bréal (1900: 27-34)を参照。
- 17) Bybee (2007: 271-272)によると, 生起頻度が基準を超えて高い構文では, 同時に要素の定着度 (en-

- trenchment) も高まり、かえって変化を妨げる免疫力となることがある。これを「保守効果」(conserving effect) と呼ぶ。例えば、代名詞は格標示 (case-marking) に関して普通名詞より保守的なふるまいを示すが、これは前者のトークン頻度が後者よりはるかに高く、保守効果が働くからだと考えられる。
- 18) これは19C–20C 初頭の小説を用いた前田 (2019a) による調査の結果に基づく。
- 19) 所有格主語の顕示化が there 主語をもつ構文にかざられる理由については、前田 (2019b) を参照。
- 20) (18)–(21) のような例の存在は、場合によると、所有格主語の有無に関わらず HG が動名詞として分析される可能性を示唆している。3.1節では、一般的な見解にしたがい、(8a) の構造を非文法的 (ungrammatical) な構造だとしたが、(18)–(21) では、動名詞が (8a) の [GRD] に相当する位置に生起している。これは、(5d) で外文法的な構造 [_{NP} N NP] が許されるのと同様、脱落した in の意味機能が動名詞に重畳した結果可能となるのかもしれない。とすると、主語をもたない通常の動名詞もやはり、現在分詞でなく動名詞であるという可能性を拭いされない。しかし、現時点では、明確な結論を下すには時期尚早と思われるので、この可能性の是非については今後の課題とさせていただきます。
- 参考文献**
- 秋元実治・前田満 (2013) 「文法化と構文化」, 秋元実治・前田満 (編) 『文法化と構文化』, ひつじ書房, 東京, 3–40.
- 秋元実治・青木博史・前田満 (編) (2015) 『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房, 東京.
- Barlow, Michael and Suzanne Kemmer (eds.) (2000) *Usage Based Models of Language*, UCLA, Stanford.
- Barðdal, Jóhanna, Elena Smirnova, Lotte Sommerer, and Spike Gildea (eds.) (2015) *Diachronic Construction Grammar*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Behrens, Heike and Stefan Pfänder (eds.) (2016) *Experience Counts: Frequency Effects in Language*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Blumenthal-Dramè, Alive (2012) *Entrenchment in Usage-based Theories: What Corpus Data Do and Do Not Reveal about the Mind*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Bréal, Michel (1900) *Semantics*, William Heinemann, London.
- Bybee, Joan (2001) *Phonology and Language Use*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bybee, Joan (2002) “Sequentiality as the Basis of Constituent Structure,” in Talmy Givón and Bertram F. Malle (eds.), *The Evolution of Language out of Pre-language*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 109–134.
- Bybee, Joan (2007) *Frequency of Use and the Organization of Language*, Oxford University Press, Oxford.
- Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bybee, Joan (2013) “Usage-based Theory and Exemplar Representations of Constructions,” in Thomas Hoffmann and Graeme Trousdale (eds), *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, Oxford University Press, Oxford, 49–69.
- Bybee, Joan and Paul J. Hopper (eds.) (2001) *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Coussé, Evie, Peter Andersson and Joel Olofsson (eds.) (2018) *Grammaticalization Meets Construction Grammar*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Croft, William (2007) “Construction Grammar,” in Dirk Geeraerts and Hubert Cuykens (eds), *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*, Oxford University Press, Oxford, 463–508.
- Dąbrowska, Eva and Dagmar Divjak (eds.) (2015) *Handbook of Cognitive Linguistics*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- De Smet, Hendrik (2013) *Spreading Patterns: Diffusional Change in the English System of Complementation*, Oxford University Press, Oxford.
- Diessel, Holger (2004) *The Acquisition of Complex Sentences*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Diessel, Holger (2015) “Usage-based Construction Grammar,” in Eva Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), 296–322.
- Diessel, Holger (2016) “Frequency and Lexical Specificity in Grammar: A Critical Review,” in Heike Behrens and Stefan Pfänder (eds.), 209–237.
- Diessel, Holger (2019) *The Grammar Network: How Linguistic Structure Is Shaped by Language Use*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Divjak, Dagmar and Catherine I. Caldwell-Harris (2015) “Frequency and Entrenchment,” in Eva Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), 53–75.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Mary C. O’Connor (1988) “Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*,” *Language* 64, 501–538.

- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, Oxford.
- 原沢正喜 (1957) 『現代口語文法』 研究社, 東京.
- Heine, Bernd (2002) “On the Role of Context in Grammaticalization,” in Ilse Wischer and Gabriele Diewald (eds), *New Reflections on Grammaticalization*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 83–101.
- Jespersen, Otto (1947) *A Modern English Grammar, on Historical Principles* (Part V), George Allen & Unwin, London.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford.
- 前田満 (2016) 『史的構文研究—構文発達のダイナミズム—』 博士論文, 立正大学.
- 前田満 (2018a) 「gold だけでなぜ「金メダル」?—省略と意味変化—」 米倉綽・中村芳久 (編) 『英語学が語るもの』, くろしお出版, 東京, 109–125.
- 前田満 (2018b) 「脱落現象と構文化」 口頭発表, 日本英文学会中部支部第70回大会, 於愛知学院大学.
- 前田満 (2019a) 「半動名詞の発達と構文化」 『近代英語研究』 第35号, pp. 59–84.
- 前田満 (2019b) 「動名詞主語をもつ半動名詞の意味するもの」 ms., 愛知学院大学.
- 前田満 (2020a) 「構文化から見た外適応と文法化」 『人間文化』 第35号, pp. 21–43.
- 前田満 (2020b) 「英語史に見る否定要素の脱落」 口頭発表, 言語変化・変異研究ユニット第6回ワークショップ. (オンライン)
- 大室剛志 (2016) 「構文の成立過程とその後の展開—半動名詞構文を中心に—」 小川芳樹・長野明子・菊池朗 (編) 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』, 開拓社, 東京, 64–77.
- Poutsma, Hendrik (1928) *A Grammar of Late Modern English* (Part 1), P. Noordhoff, Groningen.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
- Sanford, Daniel (2014) “Bybee’s Usage-based Models of Language” in Jeannette Littlemore and J. R. Taylor (eds.), *The Bloomsbury Companion to Cognitive Linguistics*, Bloomsbury, London, 103–114.
- Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford.
- 使用コーパス：
 Corpus of Contemporary American English (COCA)
 Corpus of Historical American English (COHA)